

崔承喜は朝鮮の舞踊家で、1911年に韓国の江原道（現在は南北に分断されている）の裕福な家庭に生まれました。今年が生誕110年にあたります。

1926年に兄の誘いで石井漠舞踊団の「囚われた人」ソウル公演を見て、日本人舞踊家石井漠に師事することを決意し渡日しました。「囚われた人」とは、白衣を着せられ縄を打たれ繋がれて連行される朝鮮人の姿で、植民地下での支配者と被支配者の関係が象徴的に表現されていたのです。この日本人との出会いが、舞踊家として世界へ出ていく契機となりました。

1931年にプロレタリア文学者安漠と結婚し日本で舞踊研究所を設立すると、夫が彼女の公演のプロデューサーとなり欧米や南米、日本、満州などを巡業して回りました。

彼女の大きな功績は、日本の支配下で文学や芸術において失われていく民族性を固守し、発展させようという強烈な志向が噴出している1920～30年代に、様々な舞踊を極め現代舞踊に朝鮮の民族的要素を取り入れて舞台芸術に押し上げたことです。

川端康成は「洋舞踊の日本一は崔承喜だ」と書き、中野重治は「西洋的な踊りから朝鮮の民族的舞踊はいつそう高い新しい姿が表れ、深いところで心をゆすった」と書きました。在日の朝鮮人たちは、被支配民族としてのオリエンタリズムをはねつける力強さや躍動する息遣いに、新しい朝鮮の希望と喜びを見出したのです。

1945年8月朝鮮は植民地支配から解放され、世界で称賛されていた崔承喜はさらに活躍の場を広げるはずでした。しかし東西の冷戦とそれに続く半島での戦争は朝鮮民族の南北対立、分断が始まり、否応なしに政治に巻き込まれていくこととなります。

1946年一家は北へ行きましたが、人生の後半は栄光と苦難の連続でした。舞踊家同盟の委員長に選任され人民俳優の称号を受けたり「共和国創建10周年」を記念した音楽舞踊叙事詩では総振り付けを任されるなど大きな活躍をする一方で、戦時中に日本軍の慰問をしたことが批判されたり、夫の失脚とともに強要された本人の自己批判、一家の軟禁などつらい体験をしました。芸術と政治、評価と否定の間に翻弄されつつも舞踊を続け、69年8月に死去しました。

今では平壤の愛国烈士陵园に安置されています。

参加者からはアンケートを通じて、次のような声があがりました。

時代に翻弄されながらも舞踏家として卓越した才能を発揮し、力強く生き抜いた一人の女性がおられたことを知れてよかった。今の日本の平和を維持していきたいと思う。知らないことを知る楽しみを実感した。全く知らず勉強になった。K・POPにも通じる踊りがあるのは民族の中に流れている等々。

近くて遠い朝鮮半島にある南北の分断国家。そこには日本の政治常識では想像ができない苛烈な歴史が流れていることを実感しました。今後も興味を持ち続け、お互いの理解を深めて行ければいいなと講義を聞いて考えました。